

《履修上の留意事項》面接授業と遠隔授業の併用実施

《担当者名》鎌田樹寛

【概 要】

作業療法における中核概念である「人の作業」について深い理解を得るため、以下の内容について学ぶ。 作業の定義・分類、作業的存在の理解、作業の影響などに関すること。 作業療法の歴史的変遷（アメリカ）を分析した文献を基にして、作業療法の理念や理論化を学び、専門職としての同一性を高める。

【学習目標】

本授業は、DP3に該当する科目である。具体的には、作業療法の中核的概念である「人の作業」についての深い理解を得るため、大きく2つの内容で構成されている。前半（1～6回）では、各テーマに対する講義や演習（評価法を用いた情報収集や分析結果・解釈に基づくレポートを作成できること）である。後半（7～15回）では、アメリカ作業療法に関する歴史分析に基づく作業療法の理念（哲学）や理論化（科学的思考や学際的視点）の紹介として、作業行動理論・人間作業モデルを学び、その概要を知ることとなる。

1. 人の作業の定義と分類について説明と解釈ができる。
2. 作業的存在について説明と解釈ができる。
3. 自分や他者の作業に関する情報収集や結果・解釈に基づくレポートが書ける。
4. 作業の影響について説明と解釈ができる。
5. 作業療法の理念（哲学）と理論化（科学的・学際的視点）の成立について説明ができる。
6. 作業行動理論、人間作業モデルの概要について説明ができる。

【学習内容】

回	テーマ	授業内容および学習課題	担当者
1	人の作業の定義と分類及び、作業的存在について	1. 作業の定義、分類について理解を深める。 2. 人の人生や生活が様々な作業から構築されていることや作業が生活の中に深く織り込まれていることを理解し、人が「作業的存在である視点」について学ぶ。	鎌田樹寛
2	作業的存在としての自分および他者の理解	1. 作業的存在（形態・機能・意味の視点）について学ぶ。 2. 自らが作業的存在であることについて、作業質問紙や作業バランス自己診断を通して、自己評価を行い、「作業バランス」や「習慣」について理解を深める。	鎌田樹寛
3	作業的存在としての自分および他者の理解	自らの興味や役割について、NPI・興味チェックリストや役割チェックリストを用いて分析を経験し、興味・役割の数やその傾向等をこれまでの発達過程も含めて理解を深める。	鎌田樹寛
4	作業的存在としての自分および他者の理解	自らの作業的存在の視点を踏まえ、他の学生に対して、その人の作業を中心としたインタビュー（作業歴）を試み、自分以外の人を作業的存在として解釈できることを学ぶ。	鎌田樹寛
5	作業的存在としての自分および他者の理解	第4回講義と同様に、他の学生に作業を中心としたインタビュー（作業に関する自己評価）を試み、自分以外の人を作業的存在として解釈できることを学ぶ。	鎌田樹寛
6	作業の影響力	障害を持ちながらもいきいき暮らす人々を紹介し、そこに表れた作業の影響力について、意見を述べ合うこと（グループ討議）で、作業の個人や組織・社会を変える力を感じ取る。	鎌田樹寛
7	作業療法の歴史分析（哲学）	作業療法の成立に関して、その歴史的背景（アメリカ）「作業療法の哲学（アドルフ・マイヤー）」について学ぶ。	鎌田樹寛
8	作業療法の歴史分析（哲学）	作業療法の成立に関して、その歴史的背景（アメリカ）「作業療法の哲学（アドルフ・マイヤー）」から	鎌田樹寛

回	テーマ	授業内容および学習課題	担当者
		生じた「作業パラダム」(人の主観的側面)について学ぶ。	
9	作業療法の歴史分析(哲学)	作業療法の成立に関して、その歴史的背景(アメリカ)「作業療法の哲学(アドルフ・マイヤー)」から生じた「作業パラダム」(人の主観的側面)について学ぶ。	鎌田樹寛
10	作業療法の歴史分析(理論化;「科学的・学際的思考」)	作業療法の成立に関して、その歴史的背景(アメリカ)「機械論パラダイム」と「同一性の危機」について学ぶ。	鎌田樹寛
11	作業療法の歴史分析(理論化;「科学的・学際的思考」)	作業療法の理論化(科学的・学際的思考)変遷に関して、作業パラダムの現代化に通じる「作業行動理論」について学ぶ。	鎌田樹寛
12	作業療法の理論化(科学的・学際的思考)	作業療法の理論化(科学的・学際的思考)変遷に関して、現代のパラダムに通じる「人間作業モデル」について学ぶ。	鎌田樹寛
13	作業療法の理論化(科学的・学際的思考)	作業療法の理論化(科学的・学際的思考)変遷に関して、現代のパラダムに通じる「人間作業モデル」について学ぶ。	鎌田樹寛
14	知識の確認	作業療法の哲学的姿勢に基づいた学際的知識、作業行動理論や人間作業モデルの主要な概念について、筆記試験を用いて確認する。	鎌田樹寛
15	まとめ	講義全体のまとめと振り返りを通して、「人の作業に関する視点」について、その理解の深まりや作業療法や作業療法士への同一性の高まりを実感する(グループ編成での質疑討論)。	鎌田樹寛

【評価方法】

1. 授業回数1-6回までのレポート課題 30%
2. 授業回数7-13回までの試験 50%
3. 授業回数1-15回としてのレポート課題 20%

レポート課題の成果確認については

講義に合間に共通することをフィードバックする

担当教員の研究室(持ち出し禁止)において、模範となるレポート閲覧を可とする

【備考】

教科書 : ギャリー・キールホフナー(山田孝監・訳)著 「作業療法の理論原書第3版」 医学書院 2008年
適宜資料を配布する。

参考書 : 吉川ひろみ 著 「「作業」って何だろう」 医歯薬出版 2008年
吉川ひろみ 著 「「作業」って何だろう第2版」 医歯薬出版 2017年
レニー・R・テイラー(山田孝監・訳)著 「キールホフナーの人間作業モデル改訂第5版」協同医書 2019年
葉山靖明 著 「だから、作業療法が大好きです」 三輪書店 2012年
秋元波留夫・富岡詔子 編著 「新作業療法の源流」 三輪書店 1991年
R Zemke・F Clark(佐藤剛監・訳)編著 「作業科学-作業的存在としての人間探究-」 三輪書店 1999年

【学習の準備】

- ・ 授業回数1～6回では、事前の配布資料や課題内容を熟読して、実際に取り組めるように準備すること(準備時間80分)。
- ・ 得られた結果から、その解釈や判断を行うにあたり、必要があれば担当教員に参考書等を尋ねること(80分)。
- ・ レポートの記述については、前期導入科目「文章指導」の知識を実践できるように復習すること(80分)。
- ・ 授業回数7～15回では、配布資料と教科書や参考書で予習・復習すること(各80分)

【ディプロマ・ポリシー(学位授与方針)との関連】

(DP3) 作業療法士として必要な科学的知識や技術を備え、心身に障害を有する人、障害の発生が予測される人、さらにはそれらの人々が営む生活に対して、地域包括ケアの視点から適切に対処できる実践的能力を身につけている。

【実務経験】

作業療法士

【実務経験を活かした教育内容】

医療機関での実務期間（19年）の経験を活かし、「人の作業」の広さや深さについて、具体的なテーマや課題を通した講義や演習（レポート課題）を通して理解を促す。